ふる里日記

古河で育った染谷さんのふる里の思い出

「ここでよく泣いていたなぁ……」。古河に帰ってくるたび、幼いころから練習に明け暮れていた日々を思い出します。父は空手道は素人でしたが、熱心に勉強し、毎日自主練習に付き合ってくれていました。家が道場ではないので、自宅前の駐車場で、地下足袋を履いて泣きながら練習に打ち込みました。大学で寮生活が始まるため上京するころには、兄が全日本学生で優勝し日本一に。そして姉は世界大会、全日本選手権、全日本学生、すべて優勝という偉業を成し遂げました。大好きな兄と姉が活躍し、誇らしく嬉しい気持ちと別に、私の頭の中にはいつも「まだ結果を残していないのは私だけ……」という悔しさがありました。

▲帝京大学をこの春卒業。空手道部の女子主将を務めました
(写真提供：空手道マガジン月間JKFan)

大学3年生の夏休み、私を変えた出来事があります。古河に帰り、両親と食事をしていたときでした。お店に飾られていたメッセージカードに心を奪われました。『人をねたまず、人と比べず、我身を信じ進むべし』。今まで兄妹と比べてばかりで、自分自身と向き合っていなかったことに気が付きました。幼いころから、頑張る姿を見守ってくれていた故郷が「自分を信じて、あなたらしく進みなさい」と背中を押してくれたようでした。そして、帰省するたびに温かく迎えてくれる両親に、どうしても結果で恩返しがしたいと思いました。

元気を取り戻し、夏休みも必死で練習し続け、ついに世界大会の切符を勝ち取りました。初出場の世界大会では、相手が誰であろうと自分の戦い方を貫くことだけを考えました。無駄なことは一切考えずに目の前の試合だけに集中して戦い、気が付けば銅メダルを獲っていました。苦しみを乗り越えたからこそ成長することができたと感じた瞬間でした。

世界でも通用するという自信をつけ、大学最後の全日本学生に臨みました。兄妹三人揃っての全国制覇がかかっていたので、優勝への執念は凄まじかったと思います。自分を信じて戦う強い気持ちが、気迫となって試合に表れ、ついに念願の三兄妹で日本一を獲ることができました。背負っていたものが軽くなり、安心感で涙が止まりませんでした。

私は一番苦しんだ時に支えてくれた家族、先生方をはじめとする周囲の方々、そして古河市への感謝の心を忘れません。この気持ちを力に変えて、今後も自分らしく挑戦していきたいです。

染谷真有美さん
[姉の香予さん(写真左)と優勝を喜ぶ]